



Title	シェイクスピアのソネット50番：日本語訳の考察を 絡めて
Author(s)	寺浦，麻由
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2021，2020，p. 29- 40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シェイクスピアのソネット 50 番 —日本語訳の考察を絡めて—

寺浦麻由

1. はじめに

本論では、シェイクスピアのソネットの 50 番について考察する。本論執筆の契機は、渡辺秀樹先生の認知レトリック論 B の授業でソネット 50 の発表を担当したことである。本論は次のような手続きをとる。まず、1 で詩の基本的な解釈を提示する。2 では、馬と乗り手の関係を中心に分析を行う。そして、3 では 50 番のメタファーについて考察し、認知言語学の立場からも 50 番を再解釈する。4 では *Sonnets* 50 と 51 の関係性についてまとめる。5 では拙訳を掲載し、筆者自身の翻案(adaption)的な訳出の工夫を説明する。6 ではまとめにうつる。そして付録として 50 番の日本語訳を掲載する。

適宜、*The Oxford English Dictionary*(以下 OED)に収められた用例を掲載し、シェイクスピアのソネットと絡めて論じる。

1.1. 詩について

How heavy do I journey on the way, When what I seek (my weary travel's end) Doth teach that ease and that repose to say, 'Thus far the miles are measured from thy friend.' The beast that bears me, tirèd with my woe, Plods dully on, to bear that weight in me, As if by some instinct the wretch did know His rider loved not speed being made from thee: The bloody spur cannot provoke him on, That sometimes anger thrusts into his hide, Which heavily he answers with a groan More sharp to me than spurring to his side; For that same groan doth put this in my mind: My grief lies onward and my joy behind.	なんと重い心で、私は旅をつづけていることか、 私のもとめるもの(つまり、つらい旅の終り)が そのくつろぎ、その憩いにこう言わせるのだもの、 「おまえは友からこれだけ遠く離れたわけだね」と。 私をのせた馬は、私の嘆きに疲れはてて、 のそのそと歩みを進め、私のこの重い気持を運んでゆく。 まるで、やつめ、この乗手はきみから離れるのがいやさに 急ごうとしないのを、本能でさとったかのようだ。 時には、怒りにまかせて横腹を突きはするものの、 血まみれの拍車にも、やつの足を早めるだけのききめはない、 ただ、ものうげな呻き声でこれに答えるだけだ。 脇腹の拍車も痛かろうが、私には呻きの方がもっと痛い。 なぜなら、まさにこの呻きが私に思い込ませるのだ、 悲しみが行手にあり、歓びは背後に去ったことを。 (高松,1986;72-73)
---	--

50 番と 51 番は対をなし、共に詩人が友(“thy friend”)から離れる旅に出ることについて、馬の描写を交えながら綴る。乗り手は旅に出ても、悲しみを抱えている。「一日の旅をおえて休息についても、次第に友から離れて行くことのみが心にかかる」(高松,2009;234)のだった。乗り手の悲しみを悟ったかのように馬(“wretch”)の歩みは遅い。拍車(“spur”)で、横腹を蹴るが、それも虚しく一向に速く歩こうとはしない。拍車が血まみれになるまで蹴っても、馬から返ってくるのは、うめき声(“a groan”)だけである。そのうめき声で、乗り手は悟る。行く手には悲しみが横たわり、喜びは背後にさったことを。Evans(1996;158-159)は、L14“joy”が(1)happiness を、“grief”が (2)the friend を表すのではないかと考察していたが、出発地と目的地の解釈は研究者によって多岐に渡るため考察に値するが、別稿に譲りたい。

1.2. 主な音韻、音象徴

次に、詩の形式について考察する。50 番は ABABCD CDEF EFGG (iambic pentameter) の形で 14 行(3 つの quatrains と 1 つの closing couplet)で構成されている。A:way,say (/ei/), B:end, friend(/end/), C:woe, know(/ou /), D : me, thee(/i: /), E : on, groan(/ou n/), F : hide, side(/a' id /), G : mind, behind(/aɪnd/) の音韻が確認できる。長音(/ou /)で乗り手の別離の嘆き、馬の呻きを示しているのが大きな特徴で

ある。

また、L4 の“miles”, “measured”, L5 “beast”, “bears”, L6 “sharp, spurring, side”などの頭韻(alliteration)が挙げられるだろう。12行目の“sh”, “s”音は馬の腹皮に亀裂がはいる音である。L1 heavy, journey, L3 ease, repose, L8 loved, speed, made, の脚韻(rhyme)も作品全体に響いている。

1.3. レトリック

主なレトリックについて言及しておきたい。対照法(antithesis)として目立つのは、L3 ease / L2 weary、そして L14 grief / L14 joy, L14 onward / L14 behind だろう。渡辺(2019)によれば、感情語 grief と joy の対照法が見られるのは、この 50 番と 42 番のみである。

そして、50 番の要と言っても過言ではないのが、共感覚(synesthesia)である。L12-13 において乗り手の聴覚が、心の痛覚へと伝染し読者を混乱させる。

また、L8 “bloody spur”は、転移修飾語(transferred epithet)である。「馬の脇腹を蹴った結果、拍車(ばし)が血まみれになるわけだから、この ‘bloody’ は一種の転移修飾語ということになる」(柴田, 2004: 52)。このレトリックが、乗り手、馬の感覚を曖昧に捉えさせ、混乱を生み出している。

L4 ‘Thus far the miles are measured from thy friend.’ は Journey メタファーを逆手にとった皮肉(irony)である。(詳しくは 3.1 で言及する。)逆説(paradox)として L8 His rider loved not speed being made from thee: が目立つ。“make”は通常 “forward motion”を表す(Booth, 1978: 217)¹。これについては 3 のメタファーの考察で詳細に言及する。歴史劇『リチャード 2 世』のボリングブルックのセリフからも、この逆説が読み取れる(Kerrigan, ibid; 79-80)。

そして、L7 “As if by some instinct the wretch did know”は、撞着語法(oxymoron)である。知識を持ち合わせない獣(“the wretch”)が、知識を持ち合わせ乗り手の気持ちを知悉する(“know”)矛盾が感じられるからだ。

1.4. 詩の構造について

本小節では、詩の構造について言及する。まずは先行研究の詩形についての解釈を提示する。次に、筆者の解釈を提示する。

1	How heavy do I journey <u>on</u> the way,
2	When what I seek (my weary travel's end)
3	<u>Doth</u> teach <u>that</u> ease and <u>that</u> repose to say,
4	‘Thus far the <u>miles</u> are <u>measured</u> from thy friend.’
5	The <u>beast</u> that <u>bears</u> me, tirèd with my woe,
6	Plods dully <u>on</u> , to bear that weight me,
7	As if by some instinct the wretch did know
8	His rider loved not speed being made from thee:
9	The bloody spur cannot provoke him <u>on</u> ,
10	That sometimes anger thrusts into his hide,
11	Which heavily he answers with a <u>groan</u> ,
12	More sharp to me than spurring to his side;
13	For <u>that</u> <u>same</u> groan <u>doth</u> put <u>this</u> in my mind:
14	My grief lies <u>onward</u> and my joy behind.

【図 1】 詩の形式 先行研究

図 1 に示したように、囲み枠の that, this, doth など形成された L3 L13 による左右対称性(symmetry)を L13 の empty syllables (that, same, doth) によって崩す構造が成り立っている(Booth, ibid; 217)。さらに、L2-4 の内容を L13-14 で具体的に描写する(網掛け部)構造もみられる(Booth, ibid; 217)。ペンドラーによれば、キーワードは on であるがそれは波線で示した(online1)。

¹ Nay, rather every tedious stride I make / Will but remember me what a deal of world / I ander from the jewels that I love. / Must I not serve a long apprenticeship. R2 I.3.268-70 「いや、むしろ私の踏みしめるもの憂い一歩一歩は、私の愛する人々という宝石から、いかに遠くまで引き離されたかを思い出させるだけでしょう。」(シェイクスピア, 1958b: 45)

1	How heavy do I journey on the way,
2	When what I seek (my weary travel's end)
3	Doth teach that ease and that repose to say,
4	'Thus far the miles are measured from thy friend.'
5	The beast that bears me, tired with my woe,
6	Plods dully on, to bear that weight in me,
7	As if by some instinct the wretch did know
8	<u>His</u> rider loved not speed being made from thee:
9	The bloody spur cannot provoke <u>him</u> on
10	That sometimes anger thrusts into <u>his</u> hide,
11	Which heavily <u>he</u> answers with a groan,
12	More sharp to me than spurring to <u>his</u> side;
13	For that same groan doth put this in my mind:
14	My grief lies onward and my joy behind.

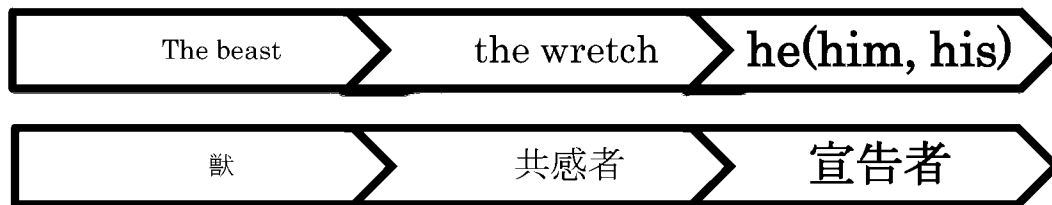
【図 2】 詩の形式 筆者による解釈

さて、次に筆者なりの解釈を図2と共に記しておきたい。中心主題(hypogram)が “way, when, what, weary, woe, weight, wretch”(詩中網掛け部分)によって、詩全体に響いていることがわかる。前半部分は、呻き“woe”を中心主題として考えるのが妥当だろう。が、それ以外にも目立つ中心概念がある。表に示したように、詩を二分割すれば、後半に馬に対する男性名詞 he の主格、所有格、目的格が集中(囲み枠)していることがわかる。これは主題 “horse”を指す hypogram の可能性がある。後半部分での畳み掛けは、馬の地位向上と、乗り手との同化を表しているといえるのではないだろうか(詳しくは、2.分析参照)。“h”による hypogram を、試訳に馬にまつわる語彙を散りばめることによって再現したことについては、のちに言及したい。(5.試訳参照)

2. 分析

2.1. 馬の立場について

本小節では、馬の立場について考察する。多くの研究者が指摘しているとおり、馬と乗り主の感覚の境界線は曖昧である。例えば5行目の“tired”の先行詞は“me”と“beast”の両者だと考えられる(Evans,ibid.)。同様に9行目の“The bloody spur cannot provoke him on”の“him”も本来であれば、「8行目 the beast を受けるのだから it でよい」(大場,2018;114)。しかし、him になっているのには理由があると考えられる。ブースも9行目の him に関して“Common sense says that him refer to the horse, but the grammatical antecedent is His rider; the vagueness of designation furthers the ongoing process of identifying the horse with the rider.”(Booth,ibid;217)と述べている。その関連として50番で、馬の呼称が“beast”から“wretch”になり“he”に変化するのは興味深い。“beast”という動物への呼称から“wretch”という人にも動物にも使用可能な呼称になり、そして最後に男性名詞“he”で完全な擬人化用法となる。ただの獣、そして心の重さを共に感じてくれる共感者、そして最後に、L14で残酷な事実を告げる宣告者としての地位の向上を表すと考えた。その関係性の変化を、図3に示した。



【図 3】 馬の呼称の変化(地位の高さ、低さを、大小で表した。)

さて、“wretch”の使用による効果が果たす役割はこの14行詩において大きい。大場は、この“the

wretch”に対して「“the wretch”を通してその馬と “rider”である “The Poet”とが思いの中で重なっていく。(大場,2018;114)」と、50 番においてかなり重要な提言を一文で簡潔に述べている。「“the wretch”が、擬人化の始まりとしての標識となり、馬と乗り手の境界線がなくなっていく」と換言できるのではないだろうか。“wretch”という人にも動物にも適用される侮蔑、愛憎、哀れみ、慈しみなど様々な感情が想起される言葉を利用することで、馬の一筋縄ではいかない存在を示しているのは確かである。そして、“wretch”に潜むオクシモロンの多義性(ambiguity)こそが、乗り手の感情を知る上で重要なのだ。また、その多義性が 50 番の肝となる。

“the wretch”が、動物を呼称する “beast”と擬人化的表現の“he”の中間を指していることに注目した大場は、日本語訳を工夫している。「畜生のくせに」(柴田,2004;53)「畜生ではあるが」(中西,1967;102)と翻訳した二者のように、「畜生」という侮蔑語を使用せず、「可愛い奴め」と訳している。エヴァンズの注釈には “poor creature” (without pejorative weight)(Evans,ibid.)と記載されている。OED で動物、鳥、虫に対して、“wretch”を使用する用例(d. Applied to animals, birds, or insects.)の欄には、シェイクスピアによる用例は認められない。しかし、“e. A person or little creature. (Used as a term of playful depreciation, or to denote slight commiseration or pity.)”の項には用例がある。1599 年の *Romeo & Juliet* “The pretie wretch left crying, and said I.” i. iii. 46 では、ジュリエットを指して “wretch”という語彙が使用されている。ジュリエットの昔話をする乳母は、その可愛さを、キャピュレット夫人に話し出す。乳母の愛情は募り、可愛さの余り、ジュリエットを “wretch”と呼称してしまう。福田恆存は、その愛情を明らかに示すため「可愛いお馬鹿さんが泣き止んで(シェイクスピア,1983;40)」と翻訳している。

もう一つの用例は *Othello*(1622)のオセロとデズデモーナのやりとりからである。“Excellent wretch, perdition catch my soule, But I doe loue thee.” iii. iii. 91 「いぢらしの我妻や。我御身を愛さずば、我魂に呪いあれ、我れ御身を愛さずば」(シェイクスピア,1909;186)とデズデモーナに対して、“wretch”を使用している。オセロが、デズデモーナのいじらしさ、可憐さに対して思わず放った言葉である。つまり、格下で従順な存在のいじらしさを “wretch”一語で表している。福田恆存は “Excellent wretch”を「かわいい女だ! (シェイクスピア,1973;85)」と翻訳している。

このように自分よりも下位の、また、か弱い存在に対する感情を読み取ることができる。表 1 に “wretch”の英和辞典の意味をまとめた。

辞書	意味
ジーニアス英和辞典	1. 気の毒な人、とても不幸な人 2. 見下げ果てたやつ、悪党; <u>[愛情を込めて]</u> やつ、わんぱく小僧
新英和大辞典	1. 不運の人、悲惨な人、哀れな人(miserable person) 2. 恥知らず、浅ましい人間、卑劣漢(scoundrel)、(かわいい)やつ(rogue)★ <u>しばしばふざけたののしり語あるいは愛情の表現として用いられる。</u>
リーダーズ英和辞典	哀れな人、みじめな人; [joc] ²

【表 1】wretch の意味(下線筆者)

下線を引いた箇所を見れば、“wretch”という語彙は愛情表現でありののしり語でもあるという二面性を持つことがわかる。また、『新英和大辞典』の「愛情を込めて」、『リーダーズ英和辞典』の「しばしばふざけたののしり語あるいは愛情の表現として用いられる」という説明から鑑みて、たった一語で、発話した人物から対象物への深い愛情が読み取れる標識であることがわかる。³

² 『リーダーズ英和辞典』の[joc]の記載によって、“wretch”はおどけた(jocular)言行だと感じられる。このおどけた態度は、50 番で乗り手が悲しみを必死で隠すための、仕掛けなのではないだろうか。おどけることで悲しみを紛らわせようとする、乗り手の切なささえも、この一語から読み取れる。

³ 牧師ジョン・ニュートンが作詞した「Amazing Grace」の Amazing grace, how sweet the sound/ That saved a wretch like me/I once was lost but now I'm found/We blind but now I see という歌詞は誰もが知っているのではないだろうか。奴隷船の船長として家畜のように黒人を船につぎ込んで非道徳的な行為を行っていた。ある日そんな彼の乗る船が嵐に見舞われ、沈没しそうになった。そのとき、思わず命が助かるように神に祈った。神への祈りが通じたのか、命を永らえる。「神は下等な存在 “wretch”である私を救いたもうた」という感謝が “That

2.2. 馬と乗り手の関係

次に、馬と乗り手の関係性について言及する。ブースによれば、馬と乗り手の関係は主に以下の3つに分類される。それを下記の表2に示した。

【表2】馬と乗り手の関係

- | |
|---|
| ①horse and rider should function as one |
| ②lover beloved are one |
| ③horse mistress /rider lover |

①horse and rider should function as one

馬と乗り手が一体として行動すること、さらに感情をも共有するという関係性は一番想像しやすい。なぜならば、人間は馬との関わりが深く、人間と馬を一つと捉える習慣があるからだ。ブースが逆の概念として挙げている、“The horse thinks one thing and he that saddles him another”ということわざ(proverb)もその習慣を元としたことわざだろう。

馬と乗り手が影響し合う例として *Astrophil and Stella*(1591)の49番があげられる(Kerrigan,ibid.)。 “Girt fast by Memorie ; and while I spure, My horse, he spures with sharpe desire my hart ;”(online2,69) 「私が私の馬に記憶の腹帯がしっかりと閉められて、私が私の馬に拍車をかけると、愛神は私の心に鋭い欲情の拍車をかける(シドニー,1976;80)」からは乗り手と馬の強固に結ばれた絆が確認できる。⁴

50番だけを読めば、馬と乗り手が同調しているといえそう。しかし51番についても考える必要がある。

51 番 Thus can my love excuse the slow offence Of my dull bearer, when from thee I speed: From where thou art, why should I haste me thence? Till I return, of posting is no need. O what excuse will my poor beast then find, When swift extremity can seem but slow? Then should I spur though mounted on the wind, In wingèd speed no motion shall I know: Then can no horse with my desire keep pace; Therefore desire (of perfect'st love being made) Shall neigh (no dull flesh) in his fiery race, But love, for love, thus shall excuse my jade: Since from thee going he went willful slow, Towards thee I'll run, and give him leave to go	私がきみから遠ざかるときには、わが愛は、のろまな馬の遅怠の罪をこう言って許してもやれる。きみのいる場所から、なぜ、急いで離れることがあろうか、帰るときまでは走る必要などありはしない、と。だがその時には、この哀れなやつにどんな言訳をあてがおう。帰りには、力のかぎり疾走してもじれったくてたまるまい。そうなれば、私は風に乗ってしようと拍車をかけるさ。翼をはやして飛んでいようと動いている気はするまい。そうなれば、どんな馬もわが欲望の速さにはかなわない。だから、もっとも完璧な愛からなるこの欲望は、<u>焰となって駆け(並の馬じゃない)、高らかに嘶くだろう。</u>だが、愛は愛の心ゆえに、こう言って私の駄馬を許してやる。 「きみから去るときに、これはわざと遅く歩んでくれた。だから帰りには私が走って、これは歩かせてやろう」 (高松,1986;73-74)
---	--

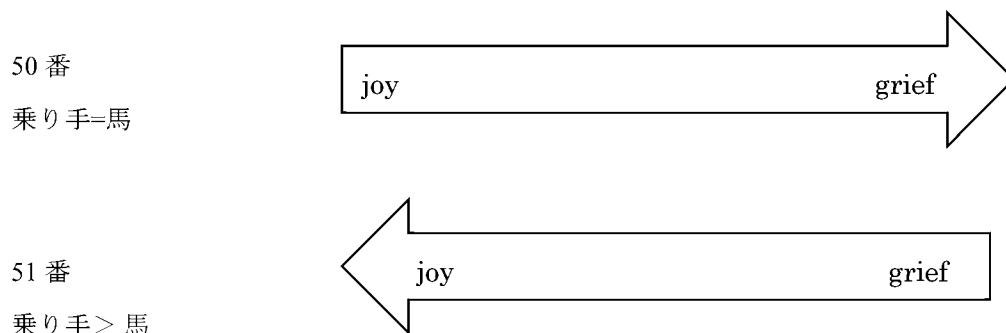
50番とはうってかわり、51番では友への帰り道について夢想する乗り手の感情が高揚する。しかし馬は、その乗り手の気概を察して速く走ろうとするわけではない(Booth,ibid.)。51番で、馬がjoyに向かって奔走するのであれば、horse and rider should function as one という関係性が成り立つのだが、乗り手の欲望の速さにはどんな駿馬も叶わないというのだ。

【図4】に50番、51番の出発点と目的地、そして乗り手と馬の関係性を簡易に示した。記号で乗り手と馬の速さの関係を表した。50番では馬がgriefに向かうため、馬は遅い。乗り手の心情と、馬の歩みが合致しているといえる。51番では、乗り手の欲望の方が早い。よって乗り手>馬と

saved a wretch like me”につながっている。奴隷船の船長という罪人も神の目から見れば、哀れな可愛い存在つまり“wretch”である。筆者は、“wretch”という単語をこのアメイジング・グレイスを通して初めて知ったが、今回神の視点から見た人間への哀れみをも折り込んだ語彙であることを改めて認識した。

⁴ さらに *Astrophil and Stella* では、馬の動きを感情の比喻媒体にするだけでなく、くつわ鎖を「心配」に、金色の浮き出し飾りは「希望」、手綱を「屈従の思い」に、鞍を「情」に、拍車を「鋭い欲情」に喩えているのが興味深い。50番の場合、拍車はおそらく「刺激」である。そして、拍車に反応しない馬を起点領域として、なんの刺激にも反応できないほど疲弊きった乗り手の心を表したメタファーを潜ませている。

表した。



【図 4】 50 番と 51 番

②lover beloved are one

次に二つ目の lover beloved are one という考え方について言及したい。Sonnets36.2 の“Although our undivided lovers are one:”という宣言で恋人同士は一つであることが明示されている。

③horse mistress /rider lover

最後の関係性は、horse mistress /rider lover である。『ヘンリー5 世』の皇太子のセリフ「それは私が乗馬に捧げた詩を真似したのだろう、私の馬が私の恋人なのだから(シェイクスピア,1958a;113)」「My horse is my mistress. Your mistress bears well.” H5 3.7.11-6 という文言から、恋人と馬を同一視していることがわかる。

さて、ここまで3つの分類について考察した。この3分類のうち、50番は①のように、馬が人間の感情に同調する存在と考えられる。しかし共感者(L.7.8)から、行く手には悲しみしかないという真実を明るみにする残酷な宣告者(L13,14)に変化するのだから、そこにはアンヴィバレントな態度が感じられる。よって、単純に①の特徴が当てはまるとも考えられない。また、51番では馬は乗り手の欲望に同調しないでノロマなままなのだから、乗り手と馬は同じ動き、心理を持ち合わせないのである。よって、正確には①②③どれにも当てはまらないと言った方がいいだろう。

2.3. 感覚の共有

本小節では、感覚の共有について考察する。馬は乗り手に拍車をかけられて血を流す。しかし馬は拍車をかけられているのにもかかわらず呻き声で答えるだけである。おそらく“spurring”は連続的で複数回の行為であるが、“groan”には一回性がある。この数の対比から、乗り手の焦り、そして馬の落ち着きが感じられる。“spur”には、“I.A device to incite a horse to move forward”という意味がある(OED 参照)。拍車による“stimulation”(刺激)に対する、この馬の“numbness”が対照的である。拍車によって痛みを感じているのは、馬であるはずだ。しかし、その馬が感じる痛みよりも、呻きの方が痛いという比較級が用いられている。乗り手が、さも拍車による痛みの程度を知悉しているかのような。ここに、馬と乗り手の感覚の共有が認められる。馬の痛覚がそのまま乗り手の心の痛覚に繋がるが、乗り手は、拍車で身を引き裂かれる痛みを知るはずがない。よって呻きが拍車の痛みよりも強いという比較表現自体がオキシモロンのである。

50番は馬の呻きを聴覚で捉え、さらに触覚で捉えている。また、馬の痛覚を乗り手が体験している。中西訳は「なぜなら そのうめき声は 私のところに強くきざみこむのだ。」となっていて、馬の痛覚と乗り手の痛覚の関係性を強調しようとしている。さも、拍車の刃先が、乗り手の心臓に食い込むようなイメージを喚起させるのだ。これは感覚の共有というレトリックの翻訳が忠実に行われている例といえるだろう。

3. メタファー

本節では、まず、下敷きとなっている50番の旅のメタファーを3.1で概説し、3.2では心のメタファー、3.3では、荷物の重さで悲しみにくれる人間の心理、3.4では気乗りしない心を馬で表すメタファーについて概観する。

3.1. 旅のメタファー

ここでは、50番の下敷きとなっている旅のメタファーについて言及する。50番は、通常の“LOVE IS A JOURNEY”メタファーを皮肉(irony)的、引喩的に使用している。皮肉というのも特に旅の道のが伸びるほど嬉しいというメタファーの性質、“the progress made is the distance covered”(Kövecses,2002;7)を逆手に取っているからだ。通常、旅の先には目的地があり、その道は目的地に近づくもののため旅の道のが長くなれば達成感が伴う。しかし50番では、道のが長くなればなるほど、悲しみも募るのだ。48番L6「きみはわが最上の歓びにして、いまはわが最大の悲しみ(シェイクスピア,2009;70)」「“Most worthy comfort, now my greatest grief,”と宣言した時点で、旅に出ることは悲しみを伴うという予兆が垣間見える。“The goal of the relationship is the destination of a journey”(Kövecses,ibid;7)が成り立たないため、乗り手にとって、行き先は悲哀に満ちている。通常ならば道中に悲しみ“grief”があっても目的地に達成の喜び“joy”が伴う。よって、旅人は、達成の喜びに早く浸ろうと、速い乗り物を好む。しか50番では“joy”は過ぎ去り、目的地には“grief”が待つ。よって乗り物は遅い方が好都合なのだ。

3.2. 心のメタファー

この詩で《HAPPY IS UP SAD IS DOWN》(Lakoff and Johnson,1980;15)が、基軸となっていることは間違いない。《心は物体である》という概念メタファーを中心に、抽象的である悲しい心を表しているのだ。“plods dully”、“groan”などで、乗り手の心を具体化してくれるのが、馬である。つまり、馬が概念メタファーを周知する役割として働く。「心は重い」という概念メタファーを“groan”で示している。動物の繊細さで、心の重さを感じとっているため、乗り手から馬に対する愛着が生まれていることもわかる。つまり馬は3.4で触れるように、乗り手の心を具体化する起点領域としての役割を果たす。心情を表現するという、悲しみにくれる人にとっての重労働を、馬は代行して本能のままに行っているのだ。

3.3. 荷の重さ⁵

「心の荷が重い」などの言葉からもわかるように、人間は悲しみなどの否定的な感情という抽象概念を、重い荷物という具体物で喩える。50番においても、重さを表す縁語である heavy, weight, dully などが目立ち、重さが大きな鍵となることが予想される。図5に起点領域を、乗り手をおぶっている馬とし、目標領域を人間の心としたメタファーをまとめた。「人間の心の悲しさは荷物である」というメタファーが成り立っているのだ。50番では、乗り手が重みであり、荷物であるということになる。

起点領域		目標領域
荷をおぶっている馬	→	悲しい心を抱える人間
荷物	→	悲しい心

【図5】馬の荷物と人間の心のメタファー

3.4. 気乗りしない心を馬で表すメタファー⁶

馬は犬と並び、人間の心情と関わりが深く、「心の駒」はそれを端的にあらわした日本語といえる。⁷「心の駒」とは『大辞泉』によれば、「心の馬」と同義で、心が激しく働き、抑えにくいことを勇み逸る馬にたとえていう語である。対して、50番の馬は動き回るのではなく、気乗りしない乗り手の心情と呼応し、とぼとぼと歩く。

50番では、乗り手の心を馬に喩える寓意のメタファーも土台となっている。つまり遅く鈍い馬の様態で気乗りしない心を表している。馬の遅さや鈍感さについて語りながら、馬の行動で乗り

⁵ 大森文子教授より、荷物の重さのメタファーを考察に加えるようにご指摘いただきました。

⁶ 表の作成にあたり大森(2020)の“The Lion’s Parliament”における寓意のメタファー”を参考にした。

⁷ 心の駒に関しては、蟬丸の「心の駒は日に千度、恋しき方に走り井の」という句が存在する。室町の歌人正徹の私家集である『草根集』には「つながれぬ心の駒もおとろへき恋路さかしく遠き月日に」日文研[online3] など、心を馬で喩えるような句が存在する。この和歌の存在を渡辺秀樹教授に教えていただきました。

手の心を端的に表している、以下の図 7 のようなメタファーが成り立つだろう。

起点領域〈動物〉	→	目標領域〈人間〉
遅い馬	→	気乗りしない乗り手の心
拍車に血を流す馬	→	血を流し呻く痛い悲しい心
拍車に反応しない馬	→	刺激にも反応しない心

【図 6】 馬の様態が表す寓意のメタファー

気乗りしない乗り手の心情を表すモチーフとして、馬が作品の中心をなす。そして、悲痛にくれる心も、馬が体現している。そして、なんの刺激にも反応しないほど悲しみに沈み込んでしまった心を、拍車に反応しない馬で表している。

3.5. 馬の行動を擬人化するメタファー

ここでは、馬の行動を擬人化するメタファーについて考察する。50 番では、擬人化(prosopopoeia)が用いられている。L5 では、“tired with”、そして L7 では “the wretch know”の箇所に擬人化がみられる。さらに L9-L12 では馬に対して、“he, his, him” が用いられている。

つまり、馬という人間への共感性が高い動物を描写する擬人化メタファーがみられるのだ。特に、L7 で、乗り主の心情を知悉している様子は、撞着語法的(oxymoron)である。馬が、さも知性を持ち乗り手の心に合わせた行動をとっているように描かれていている。

起点領域 〈人間〉		目標領域 〈動物〉
乗り手である人間の行動	→	馬の行動
人間が悲しみに呻く	→	馬の鳴き声
人間が疲れる	→	馬が遅く歩く
人間が気乗りしない	→	馬が遅く歩く
人間が何の刺激にも反応しない	→	馬が拍車にも反応しない

【図 7】 人間の生態で馬を理解する擬人化メタファー

図 7 にも見られるように、馬の行動を、乗り手である人間の行動で表すメタファーは 3.4 で考察した寓意のメタファーと合間って、読者を混乱させる。

4. 50 番と 51 番の関係性

ここでは、50 番と 51 番の関係性を考察する。51 番のソネットは、50 番と対になっている。50 番の馬は遅い。51 番で描かれるのが駿馬であれば 50 番との綺麗な対象関係が出来上がる。しかし前述したように、51 番では馬が友のもとに走るわけではない。乗り手の欲望の方がどんな駿馬よりも速いというのだ。まさに意馬心猿⁸、煩悩や妄念によって心が乱れている乗り手が描かれる。その心の乱れは、Kerrigan によれば、“neigh”という馬の鳴き声に表現されている。

Thus can my love excuse the slow offence
Of my dull bearer, when from thee I speed:
From where thou art, why should I haste me thence?
Till I return, of posting is no need.
O what excuse will my poor beast then find,
When swift extremity can seem but slow?
Then should I spur though mounted on the wind,
In wingèd speed no motion shall I know:

⁸ 『大辞泉』によれば、「意馬心猿」は、「馬が奔走し、猿が騒ぎ立てるのを止め難いように煩悩、妄念などが起こって心が乱れ、抑えがたいこと」をいう。

Then can no horse with my desire keep pace;
 Therefore desire (of perfect'st love being made)
 Shall neigh (no dull flesh) in his fiery race,
 But love, for love, thus shall excuse my jade:
 Since from thee going he went willful slow,
 Towards thee I'll run, and give him leave to go

【図 8】 51 番のソネット

次に、50 番との相違点について考える。下記の表に、感情、馬への感情、馬の鳴き声、主題、そして論の展開語を項目としてまとめた。まず、感情を比較すると 50 番では沈鬱な呻きを中心概念とした悲しみを感じずには得ない。対する 51 番では、欲望という感情語がみられる。そして、50 番の乗り主の馬に対する感情は、共感と言えるが、乗り手から、馬の歩みの遅さへの許しの感情が目立つ。また、馬の鳴き方は詩を解釈するうえで大きな指針となる。50 番では、前述したように馬の呻きが目立つ。しかし 51 番の “neigh” は、欲望を表しているという。そして 51 番の L13 の “willful slow” という言葉から、50 番の主題は “unwilling fastness” であることが推測できる。

また、Thus、Then などの副詞、But などの接続詞の総数が 51 番の方が圧倒的に多い。これは乗り手の心情に起因する。50 番は、論の展開語も見られるものの、51 番ほどではない。まさに心馬を急がせているのだ。

	50 番	51 番
感情	落ち込み(wariness)	欲望(desire)
馬への感情	共感	許し
馬の鳴き声	groan	neigh(Kerrigan, ibid.)
主題	Unwilling fastness	L13 willfull slow
Thus などの論の展開	Thus For	Thus Then Then But Since

【表 3】 50 番と 51 番の比較

50 番の共通点は “Thus and journey” ということになる(Edmondson and Wells,2004;33)。“horse” と “spur” も、当然共通点として挙げられるだろう。

5. 試訳

本節では、筆者自身の翻案を提示したい。

1 How heavy do I journey on the way, 2 When what I seek (my weary travel's end) 3 Doth teach that ease and that repose to say, 4 'Thus far the <u>miles</u> are <u>measured</u> from thy friend.' 5 The <u>beast</u> that <u>bears</u> me, tired with my woe, 6 Plods dully on, to bear that weight in me, 7 As if by some instinct the wretch did know 8 His rider loved not speed being made from thee: 9 The bloody spur cannot provoke him on, 10 That sometimes anger thrusts into his hide, 11 Which heavily he answers with a groan, 12 More sharp to me than spurring to his side, 13 For that same groan doth put this in my mind, 14 My grief lies onward and my joy behind.	いかに荷の 重たい旅か、 希求すは (長途のおわり) 休息と 安堵が告げる 教訓は、 「友からの距離 とんだ徒爾だ」 ⁹ 頓馬の呻き 駄馬も辟易 とぼとぼと 徒労に耐える 鈍な馬、 聡い駄馬 本能もちい 悟ること 乗り主は 友からの距離 奔馬好まぬ 拍車の刃先 彼には効かぬ 無益な血 時として 怒りに任せ 腹蹴るも 聴こえるは 重々しげな ひと呻き 突き刺さる 脇の拍車より 鋭利な呻き 何故ならば 呻きが刺さり 咀嚼する 鼻先に憂さ 尻尾に喜悦
---	--

⁹ L4 は当初「とんだ蛇足だ」と訳していましたが、馬の縁語の中に蛇を連想させる語が紛れ込むことは避けたほうが良いと岡部未希さんからアドバイスをいただいた。そして、「蛇足」から「徒爾」という熟語に変更した。

次に、翻訳にあたりいくつか工夫した点を列挙する。まず音韻的に工夫した部分に言及する。耳に心地よいように、できるだけ全体的に 5.7 調にした。¹⁰頭韻の形式的等価を目指すため、L4 m 音の頭韻を「友」「とんだ」「徒爾」といった「と」の頭韻にうつした。L5 の b 音の頭韻を「呻き」「辟易」の「き」の脚韻に等価した。

馬と乗り手の境界が曖昧であることがわかるように、馬の縁語を、乗り手の動作に使用した。例えば L5 の乗り手を指す“me”は「頓馬」と翻訳した。乗り手が、旅の帰結を思い知らされることを描写した L13 For that same groan put this in my mind では「咀嚼」という馬の縁語を使用した¹¹。

さらに大場訳でも「駆りたてる」の使用があることから、馬の縁語を使用するという着想を得た。そこで、馬という字体の入った熟語、「頓馬」「駄馬」「奔馬」、馬の身体部位「鼻先」「尻尾^{しりえ}」の使用を意識した。大場が、L14 を「ぼくの行手にはただ悲しみ、喜びは後方に遠のいていくばかり。」と翻訳したこと、「後方」は、「尻」との掛詞“pun”なのではないかと推測した。よって筆者も“behind”を馬の肉体を連想させる「尻尾」と翻訳した。

L7「聡い駄馬」では、原文の L7 As if by some instinct the wretch did know という微かなオキシモロンを翻訳した。L7 “As if by some instinct the wretch did know”は、知識を持ち合わせない獣(“the wretch”)が、乗り手の気持ちを知悉する(“know”)撞着語法(oxymoron)的な表現であることはすでに述べた。そこで“wretch”は、「駄馬」と翻訳した。「駄馬」には、否定的な意味しかないが、「聡い」と形容することで、肯定的な意味を添えた。動物が高い知能を持つというオキシモロンの効果を「聡い駄馬」と訳出することで再現しようとした。

L7 “some”はフランス語では荷運び用の動物“somme”との掛詞である(Booth,1978)。他にも、50 番においてかなりの数の掛詞(pun)が見られる。そこで拙訳でも掛詞(pun)を訳出することを試みた。L7 では、「どんな馬」という疑問の投げかけ、そして「鈍な馬」という馬の性質、二重の意味をのせた。そして「どんな馬？」という問いかけの後に、「聡い駄馬」という答えを置くことで、掛詞による問答をひそませた。

また、坪内逍遙が、L8 His rider loved not speed being made from thee:を「疾駆を好まざらむ、と(坪内,1934:81)」と翻訳していたことに着想を受け、「奔馬は好まぬ」と訳した。¹²

L12-13 原文の聴覚と触覚の共感覚(synesthesia)を「突き刺さる 脇の拍車より 鋭利な呻き」に反映させた。また、“bloody spur”という転移修飾語(transferred epithet)の形式を別の箇所でも等価するために、「鋭利な呻き」と訳出した。

6. 結語

本稿では、シェイクスピアのソネット 50 番について考察した。まずはじめに、1 節で、詩の解釈や象徴について考察し、2 節では分析に移った。2.1 では、馬の立場に言及し、“wretch”の意味を掘り下げた。2.2 では、馬の乗り手の関係を三種類紹介した。そして 50 番は、正確にはどの分類にもあてはまらないことを示した。2.3 では、馬と乗り手の感覚の共有について考究した。3 節ではメタファーについて言及した。4 では、50 番と 51 番の共通点について考察した。5 節では、拙訳を示した。拙訳には、ここまで分析してきた馬と乗り手の境界の曖昧性に対する解釈や“wretch”の意味を生かした。

馬は、真実を明るみにする残酷な宣告者(L13,14)でもあり共感者(L7,8)でもあるというアンヴィバレントな存在である。馬への擬人化は L5 から始まり、“wretch”も擬人化である。50 番と 51 番で対をなしているが、完全に対照的とも言えない。抽象的である「心が重い」というメタファーを“plods dully”“groan”などで具体化してくれるのが、馬である。馬が概念メタファーを体現しているからこそ、愛着が生まれてくるのだ。その愛着が“wretch”に表れている。しかしその愛着が続くのもつかの間で、最後には、L2-4 で仄めかしていた友からの距離の意味を L14 で残酷に宣告

¹⁰ 認知レトリック論 B の授業で、九鬼周造による日本語詩の脚韻を考察したことをきっかけに、日本語でも脚注を踏めるということを学習し、脚韻の効いた訳出を行った。

¹¹ 「咀嚼」は、馬の縁語とはっきりとは言い難いが、歯をすり合わせ食べ物を噛み砕く馬のイメージを喚起させようと試みた。

¹² 筆者は、三島由紀夫『豊饒の海』第二巻『奔馬』の英語翻訳を考察中であったため、オマージュとして故意に「奔馬」という語彙を用いた。

するのだ。こうした一筋縄ではいかない性質を持つ馬は、次第に存在意義を増し、それが後半部分の h 音の音象徴に表れていた。

付録 本稿で考察した “wretch” の訳出部分には下線をひいている。

旅に出たが、道中ぼくの足取りは重い、
つらい旅によって、求める目的地に達したにせよ、
得られる安堵と休息は、次のことでしかない、
「今日はこれだけ何マイルも友から離れたわけだ」と。
ぼくを乗せた馬は、ぼくの悲しみに疲れ果て、
ぼくの重い心を運ぶためか、とぼとぼと歩む。
畜生のくせに本能で感じ取っているのだろう、
乗っている人間が君のもとから離れたがってはいないのを。
時々やけになってやつの腹皮に拍車で蹴りを入れるが、
血が出てもやつは早く歩き出そうとしない、
悲しげにうめいて答えるだけ、それがぼくには、
脇腹への蹴りよりもいっそう痛く感じられるのだ。
そのうめき声がぼくに思い知らせる、
旅の先にあるのは悲しみだけ、喜びは置いてきたのだ、と。
(柴田,2004;53)

なんと重い心でぼくは旅に行くことか、
もの憂い旅の苦勞の終り、やっと辿り着いたその宿で、
ほっとした安堵と休息が、なんとこんな口上のご挨拶、
ここまでの遙かな道程はご友人からの別離の距離でしたねなどと。
ぼくを乗せる馬も、ぼくの悲しみに疲れ果て、荷となる
悲しみの重みに喘ぎながら、とぼとぼ、のろのろ、重い足取り。
可愛いやつめ、動物の本能とやらで感じているのか、
君から遠のくばかりのその速度を鞍の上の主人が嫌がっているのを。
腹立ちまぎれにそいつの脇腹を蹴りつけたりもする、
だがそんな血の拍車でやつを駆り立てられるものか、
返ってくるのは重く悲しげな呻き声、
脇腹への拍車どころかそれがぼくにはずっと痛々しい。
だってその声はぼくの心に思い知らせてくれるのだよ、
ぼくの行手にはただ悲しみ、喜びは後方に遠のいていくばかり。
(大場,2018;115)

どんなに重いところと足どりで 私は旅に行くことかー
もの憂い旅の終り 私の目的地に やっとたどりついて
私が見出す憩いやくつろぎは はるばると来た路のりだけ
君から遠ざかったことを 私に思い知らせるばかりだから
私を乗せた馬は 私の不幸にうんざりしながらも
のろのろ足を動かして 私のこころの重荷をはこぶ
畜生ではあるが 本能的に感じているかのようだ
乗り手の私が 君から遠ざかってゆく速度を好まぬことを
ときには腹立ちまぎれに 馬の皮に喰いこむほどに強く
残酷な拍車をあてても 馬を駆り立てることはできない
馬はそれに答えて 重々しくうめき声を立てる それが
私の耳には 横腹に当てる拍車よりも鋭くひびいてくる
なぜなら そのうめき声は 私のこころに強くきざみこむのだ
私の悲しみは前に横たわり 私の喜びは後にのこることを
(中西,1976;102-103)

参考文献

- 大場健治訳.(2018).『ソネット詩集』研究社.
- 大森文子.(2020).「*The Lion's Parliament* における寓意のメタファー」『レトリックとメディア』大阪大学大学院言語文化研究科.pp.21-32.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1909).『悲劇オセロ』菅野徳助訳.有朋堂書店.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1958a).『ヘンリー五世』小田雄志訳.白水社.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1958b).『リチャード二世』小田雄志訳.白水社.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1973).『オセロー』福田恆存訳.新潮社.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1967).『オセロー』菅野徳助訳.新潮社.
- シェイクスピア,ウィリアム.(1983).『ロミオとジュリエット』福田恆存訳.白水社.
- シドニー,フィリップ.(1976).『シドニ詩集』中田修訳.東京教学社.
- 柴田稔彦訳.(2004).『対訳 シェイクスピア詩集—イギリス詩人選(1)』岩波書店.
- 高松雄一訳.(1986).『ソネット集』岩波書店.
- 坪内逍遙訳.(1934).『詩篇其二』「シェイクスピア全集 39 集」中央公論社.
- 中西進太郎訳.(1976).『シェイクスピア・ソネット集』英宝社.
- 渡辺秀樹.(2019).「英詩感情語のメタファーの系譜 第2回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考:感情語の類義・反義を中心に1」『レトリックとコミュニケーション1』pp.1-10.
- Booth, S.(1978). *Shakespeare's Sonnets*(revised ed.). Yale U.P.,
- Edmondson, P and Stanley, W.(2004) *Shakespeare's Sonnets*. Oxford:Oxford University Press.
- Evans, G. (1996). *The Sonnets*. Cambridge University Press.
- Kerrigan, J.(1986). *The Sonnets and A Lover's Complaint*. New Penguin Shakespeare
- Kövecses, Z. (2002). *Metaphor: A practical introduction*. New York: Oxford University Press
- Lakoff, G. and Johnson, M.(1980). *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press: Chicago.

インターネット資料

- Vendler, H.(1997). *The Art of Shakespeare's Sonnets*. The Belk Press of Harvard University Press. Cambridge, London, England. <<https://engleskaknjizevnostodrenesansedoneoklasicizma.files.wordpress.com/2017/08/sonnets.pdf>> [online1](accessed March 31, 2021)
- Sidney, P.(1877). *The Complete Poems of Sir Phillip Sidney*, Alexander B.G.(Eds.)https://sourcetext.files.wordpress.com/2018/01/1_sidney.pdf[online2] (accessed March 31, 2021)
- 日文研和歌データベース <https://lapis.nichibun.ac.jp/waka/waka_i153.html> [online3](最終閲覧日 4月8日(木))

辞書

- Oxford English Dictionary*(<http://www.oed.com>.)
- 松村明編(2012).『大辞泉』第二版.小学館.
- 南出康世編(2001).『ジーニアス英和辞典』第三版.大修館.
- 増田剛編(2003).『新和英大辞典』第五版.研究社.